2020年10月4日 久宝教会 世界聖餐日（聖霊降臨節第19主日）礼拝

メッセージ「言葉ではなく、生きざまに信頼する」　　牛田 匡 牧師

聖書　ヨハネによる福音書　10章31－42節

気持ちの良い秋晴れの日々が続いています。先日には夜空に明るく輝く中秋の名月も眺める事が出来ました。巷では政府主導の「GoToトラベル・キャンペーン」も相まって、秋の行楽日和に各地の観光地は大勢の人で賑わったようです。多くの人々がマスクをしているとは言え、コロナ以前のような沢山の人出を見るとと、一時期の「ステイ・ホーム」や、休業要請は何だったのかと思います。政策としてPCR検査を拡充して囲い込みをしているわけでもなく、検査をしないまま却って「GoToトラベル・キャンペーン」で全国にウイルスを拡散しているのではないかと思うと、何が正しいコロナへの対応なのか、ますます分からなくなって来ているように思えてなりません。「美しい国」や「強い日本を取り戻す」と言っていた安倍首相は、7年8カ月間という史上最長の在職記録を達成した途端に辞任し、先月の半ばからは官房長官だった菅さんが首相となり、後を継いでいます。アベノミクスによって、株価や失業率など数字の上では向上し、景気は改善したと言われていますが、実質は正規職員が減って非正規職員が増え、労働単価は下がり、平均年収も減っています。最低賃金は上がったものの、それ以上に物価が上がり、消費税も上がって、実際にはこの数年間で人々の生活は更に厳しさを増しているように感じています。経済格差は明らかに大きくなって来ています。

その間に多く聞かれるようになった言葉が、「自己責任論」という言葉でした。そして今、新しく総理大臣となった菅さんは、「国の基本は『自助、共助、公助』です」と言っています。確かに戦後の秋田県に生まれ、家業の農業を手伝いながら高校を卒業し、身一つで上京し、段ボール工場で働きながら大学へ入り、仕事と勉強の両立をした。また政治家を志してからは、国会議員の秘書という下積みを11年間も続けて、それから後、地方の市議会議員となってから国会議員になり、首相にまで上り詰めたというのは、他の2世議員とは違う、大変な苦労であり、努力家であったと言えます。まさに「意志あれば道あり」という座右の銘の通りの「自助の人」でしょう。しかし、だからと言って、「誰でも自分と同じように強い意志を持てば、必ず道は開ける」「道が開かれないのは、意志や努力が足りないからだ」と言うのだとすれば、それは大きな誤りだと言わざるを得ません。

もちろん、意志も努力も、将来への計画も大切です。それによって今をどう生きるかを見つめ直すことができます。しかし、それだけではどうにもならない事もまた、私たちの身の回りには多くあるのではないでしょうか。例えば、誰が大震災や台風や洪水で、住まいや家族を失うことを予想していたでしょうか。誰が今回の新型コロナウイルスによるパンデミックを予想していたでしょうか。突然の病気や事故を予想しているでしょうか……。私たちの予想や計画、意志や努力というものは、それが如何に硬く、強固であっても、必ず報われるものとは限りません。むしろ、運や偶然の方が、私たちの人生には大きく影響しているのかもしれません。そのような現実の中で、「道が開かれないのは、今の境遇が報われていないのは、あなたの意志や努力が足りないからだ」と言って、他人を断罪するのは裁く側の一方的な思い込みに過ぎません。そしてまた教会も時に「あなたが報われないのは、あなたの信仰が足りないからだ、間違っているからだ」などと言って、他人を断罪して来なかったでしょうか。そのことも改めて反省しなければならないと思っています。

今回の聖書のお話は、イエス様の言葉と業、行動についての、ユダヤ人との問答の場面でした。31 節には「ユダヤ人たちは、イエスを石で打ち殺そうとして、また石を取り上げた」とありますが、ここで「また」と言われているのは 8 章 59 節でもそのよう場面があったので、再び一触即発の状況になったということです。8 章で問題になったのは、イスラエル民族の父と考えられている「アブラハムが生まれる前から、『私はある』」(58)、「私はアブラハム以上の存在である」とイエス様が言われたからでしたが、今回は 10 章の 30 節にて「私と父なる神とは一つである」と言われたことが、ユダヤ人たちの怒りを買いました。

しかし、イエス様は言われました。[32]「私は、父から出た多くの善い業をあなたがたに示してきた。そのどの業のために、石で打ち殺そうとするのか」。ユダヤ人たちは答えました。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ」。ここで既に、イエス様とユダヤ人たちとが注目している先が異なっていることが分かります。イエス様は実際の業、行動について尋ねていますが、ユダヤ人たちはそうではなくて、何を言ったか言わなかったという言葉にのみ注目しています。そのためにイエス様は言葉に対して言葉で返されました。34 節です「あなたがたの律法に、『私は言った。あなたがたは神々である』と書いてあるではないか」。これは「律法」とありますが、へ

ブライ語聖書の中の「詩編」82 編の言葉です。詩編には次のように歌われています。

[1]神は神の集いの中に立ち／神々の間で裁きを下される。

[2]「あなたがたはいつまで不正に裁き／悪しき者におもねるのか。

[3]弱い人やみなしごのために裁き／苦しむ人や乏しい人を義とせよ。

[4]弱い人や貧しい人を救い／悪しき者の手から助け出せ。」

[6]私は言った。「あなたがたは神々／あなたがたは皆、いと高き方の子」

ここで言われている「神々」は、人々の間で指導的な立場にいる人間たちのことを指しています。「あなた方は神々」にたとえられる程に、尊い存在ではないか、それなのに何故、天地の創り主である神様の思いに従って行動しないのか。いつまで不正を続け、弱く貧しくされている人々を放っているのか、そのように地上の指導者たちに向けられた糾弾の言葉となっています。

イエス様の口から、この詩編の言葉を聞いたユダヤ人たちの中には、すぐにこの詩編を思い出し、皮肉を言われたと理解した人もいたかもしれません。35 節には「聖書が廃れることがないならば」という分かりにくい表現がありますが、これは直訳すると「無効になることがないならば」という意味です。聖書、律法に書かれていることは、「こういう場合は無効ですよ」などということはない、決して無効にならない。だからこそ 37 節以降ですが、「もし、私が父の業を行っていないのであれば、私を信じなくてもよい。[38]しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい」とイエス様は言われました。

そもそも「神の言葉」と訳されている言葉は、聖書に書かれている文字のことを言っているわけではありません。ヘブライ語では、言葉と出来事は同じ単語（ダーバール）であり、「神の言葉」は「神の働いた出来事」でした。ですから、イエス様は、何を言った言わないというようなことではなく、むしろ「私が行った業を見なさい」と言われたわけです。私が行った業を見れば、それが人から出たものか神から出たものかが分かるでしょう。神様の御心に適った業が行われる時、そこには紛れもなく神様の力が働いている。それが神様が共におられる証しである（ヨハネ 10：25）というわけです。

さて、今日は「世界聖餐日」です。「世界聖餐日」は、1930 年代にアメリカ合衆国の長老教会において、世界中のキリスト者が主の食卓につくことによって一致し、互いに認め合うことを願って始められたそうです。そして、第二次世界大戦によるさまざまな対立が深刻化していた 1940 年に、ア

メリカ連邦教会協議会によってエキュメニカルな祝日として定められ、戦後にはWCC（世界教会協議会）で全世界的な祝日として定められました。その趣旨は「世界中の教会が聖餐を通してキリストの交わりを確かめよう」「全教会の一致を求めよう」、そして「もう戦争は止めよう」というものでした。日本基督教団でも1958年の教団総会で「世界聖餐日」を守ることが決議され、今日に至っています。

聖餐は英語で「communion」と言いますが、語源は「共に（com-）、一つになる（union）」です。一つの食卓を共に囲み、一つのパンを分け合って食べる。食べるという行為はそのまま命の維持に直結する行為で、生きて行くために不可欠なことです。イエス様の時代のユダヤ教では、何を食べて良いか、いつ、誰と食べて良いか、どのようにして食べて良いか、など食事に関する決まりごとが細かく決められていました。それは単なる「テーブルマナー」という域を越えて、そのような食事規定を守れる人は清い人、守られない人は汚れている罪人として、人々を分け隔てする指標とされていました。「自ら強い意志をもって、律法に定められている食事規定をきちんと守りなさい」。律法学者たちからそう言われても、貧しさ故に、生まれつきの身分や職業の故に、それが出来ない人たちがたくさんいました。そのような汚れている罪人と見なされていた人たちの中に行き、今手元にある食事に感謝して、皆で手持ちのパンを分かち合って食事をしたのが、イエス様でした。お互いが裁き裁かれバラバラになって、疑心暗鬼になっていた所で、共に一つの食卓を囲み、一つのパンを分かち合って食べることで、共に一つの共同体となりました。

そしてまたイエス様自身が十字架によって裂かれ、三日の後に死から引き起こされたように、裂かれたパンとぶどう酒を頂くことで、私たちもまた復活のイエス様と共に生きる者とされていきます。それは決して「自助」や「自己責任」で語られるような自分の力ではなく、神様の側からの一方的な呼びかけであり、招きであり、恵みです。神様と共に一つになるように、隣りにいる人たちと共に一つになるように、私たちは今日も招かれています。文字に書かれた言葉は、他人を裁きます（コリントⅡ3：6）。しかし、私たちはイエス様が言われたように、言葉ではなく、その業に注目し、言葉ではなく、その生きざまに信頼して従って行きます。世界にはまだまだ差別があり、対立、争いがあります。格差もますます拡大しています。そのように分断ばかりが目に付く世の中にあっても、共に一つとなって生きて行くように、神様と隣り人たちと共に一つになるように、私たちは今日も招かれています。